「五葉山の魅力」

五葉山自然倶楽部創立10周年に寄せて

⑫

リレーエッセイ

五葉山と「山」の意義

宮城県仙台市　佐々木　俊三

数年前に住田の郷を訪れました。夏の名残の昼下がり、その山里の閑雅な風情が心をとらえ、ある懐かしい印象を喚起しました。心象に埋もれた田舎の昼下がりの光景です。

母に手を引かれ時に帰った故郷の山寺、その中腹に大きな榧（かや）の大木が立っています。空から落ちる榧の実を拾い、大人のふた抱えもある幹の回りでひとりぼっち、木の肌を撫でて遊びました。住田の郷の印象がその心象に重なったのです。

その折、五葉山のことを教えて頂きました。この連載に載る多くの方々の心洗う思い出を読み、私も訪ねたい、そんな山に変わりました。

五葉山は昔、桧山といわれたようです。桧山登山口にその名前を残していますが、封内記には「檜、栂（つが）、槻（つき）」の大木が多いと書かれ、檜（桧）を代表とする貴重な山の幸を人々に供してきたのでしょう。火縄も檜の皮を材料にしたようです。

いつも考えます。山とは人にとってどんな意義を持つものだったのでしょうか。山は里にとって異界であり幽界でした。異界ゆえに神聖となり、霊（たま）が上る墓域となり、清浄な場所となりました。

五葉山にも日枝の神社があり、日頃市には五葉山神社の本宮があります。海からの目印となる五葉山の登り口、唐丹の湾には熊野神社があります。山に入る際の不浄を強く禁じたのでした。

五葉山には山猿の群が多く、昔、その中の「大猴」に刀を佩したものがおり、山に入る者に不浄の者あれば、刀を振りかざしこれを追い立てたと封内記に記されています。「神社」と書いて「ヤマ」と詠んだ古代の用例もあり、山は昔から神威が降り立つ場所と信じられてきたのです。

神が仏に変わっても、山岳の信仰は変わりませんでした。寺号の前には必ず「山」の名号が付され、禅寺の山門には「葷酒（くんしゅ）山門に入るを禁ず」と書かれています。神社にはおそらく刀が奉納されてあったことでしょう。

仙台近郊に七つ森という山があります。森もまた神の降り立つ霊域で山を意味しました。朝鮮語でmoriは「山」と同源の語なのです。

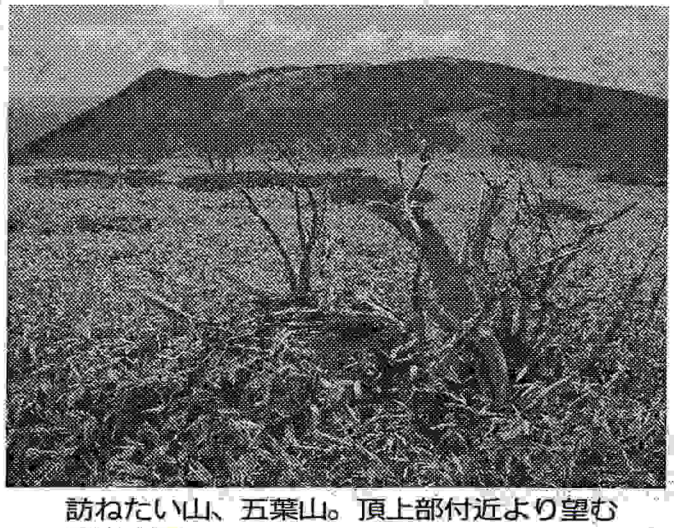
命果てれば人は霊となり、山に登ります。里に生きることは時に不浄を重ねます。人は生活の節目に、積み重なった不浄を祓う必要を感じました。

私たちが季節の折り目に山に登るのは、新しい生まれ変わりを得て、里での生活の時を更新するためでした。夏の盆に山に灯明をかざし、歳の瀬を越えた明けに神仏に詣でるのは、山に入っていのちを更（あら）ためるためです。

なぜ更ためる必要があるのでしょうか。不浄となり穢れるからです。穢れるとは「褻（け）枯れ」の謂いだといい、「褻」とは「晴れ」の反対で、「日」が重なることを言うのです。

とすれば詰まるところ、不浄の因は何でしょうか。それは「人事の時間」なのです。同じ時間が繰り返されていくこと、日々の時間が重なること、それがすなわち澱みや穢れ、不浄に繋がるのです。だからこそ蛇のように脱皮し、祓い清め、折節に生まれ変わる必要がありました。

住田の郷で幼い時の時間の重なりを喚び起こし、私もまた澱のように溜った時間、あの時この時の来し方を振り返りました。身についた穢れを清めるため、五葉山を目指そう、私は強くそのことを願うようになっています。



訪ねたい山、五葉山。頂上部付近より望む黒岩方面

【執筆者プロフィール】一九四七年生まれ。仙台市出身。東北学院大学教養学部教授。学部長時代に気仙沼、大船渡の同窓会主催による地域の開放講座に参加し、地域の人々の温かさに出会う。六月より東北学院大学学長室室長。